

## ゴールを目指して

フィリピの信徒への手紙も終盤に差しかかってきました。今日、読みました箇所パウロは胸の内を明かしています。獄中にあっても挫けることなく喜び、主にあって希望することをやめないパウロはフィリピの信徒たちを驚かせてきたと思うのですが、そのように振る舞うことのできた秘密を、3章10節で「わたしはキリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と明らかにしました。これが彼の究極の希望であり、働きの原動力、推進力だと述べたのです。そしてこの希望についてもう少しパーソナルに仲間に打ち明け話をしたのが12節以下の箇所です。

「わたしは既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」「わたし自身は既に捕らえたとは思っていません」と言葉を重ねます。興味深いですね。ここを読みますと、ヘブライ人への手紙の中に「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」という有名な言葉がありますが、まさにこのパウロの姿勢のなかに、臨んでいる事柄を確信して生き方の向きを決定している姿を見ることができます。すべからく信仰とは、まだ見ぬもの、まだ自分の手の内にはないにもかかわらず、約束された方の確かさ故に、このような生き方を可能にするダイナミックなものなのです。それにしてもパウロはなぜここで信徒たちに、自分はまだ到達していない、捕らえていない、ということを繰り返し強調するのでしょうか。幾つか理由があると思いますが、ひとつには、それは彼がこの前のところで否定した、塵芥のように見なしていると言い捨て

た彼の過去の経歴、つまりユダヤ主義者たちの多くが自分のユダヤ人としての生まれのもつ優位性を疑わない。それをもって異邦人であるフィリピの人々を、こう上から「指導」しようとする。具体的には、割礼をはじめとする律法を持ち込もうとし、パウロはこれを警戒して「あの犬どもに注意しなさい」と激しい言葉を使いました。そして、自分は復活の主イエスと出会ったゆえに、そういう彼らが誇りとしているものを捨ててきたのだと言う。かつて自分は律法の面で非の打ちどころのない者であり、ファリサイ派に属していた、生まれで言うならユダヤ人のなかのユダヤ人といってよいベニヤミン族に属することなど、ユダヤ社会においてはエリートであり、彼らの論理でいえば救われるに違いない、つまり完全であり、すでにわたしたちは捕らえている、資格があると見なしていることに対して、キリスト・イエスに出会って生き方の向きを変えた自分にとっては、救いの確信は自分で保証するものではなくて、神さまご自身が将来においてお与えくださるであろう報い、ここでの言い方によるならば、キリスト・イエスによって、上へ召して、お与えになる賞であるのだから、一切意味がなくなると断言する。救いの確信は自らの内にではなく、神さまの側にあるもので、自分はそこに向かって手を伸ばす。望みをかける。ゴールを目指して賞を得ることを目標に走ってゆく、そのことを明らかにするために重ねて、自分はまだ捕らえていない、得ていない、そう考えていないと述べるのです。また、パウロが捕らえたい、手に入れたい、到達したいと希望しているのは、自分が「キリスト・イエスに捕らえられているからです」とあるのは事柄の順序として大切です。捕らえられているから捕らえたい、愛されているから愛したい、仕えられているから仕えたい、出発点はわたしではなく、わたしにそのように望ませ、手を伸ばさせ

るのはキリスト・イエスであり、そこにおいて働いておられる神なのだということを見て取るのが信仰の力なのです。ここはもう少し掘り下げて置きたいのですが、「わたしはキリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したい」と述べたパウロの原点、ユダヤ教エリートとしてのあらゆる特権を塵芥に等しいものとしてしまったきっかけは、ダマスコに向かう道すがらで復活の主<sup>1</sup>に捕らえられたからです。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」と主が語りかけ、誰ですか、と問いかけたパウロに、わたしはあなたが迫害しているイエスである、と主はお答えになった。パウロが出会った復活された主イエスは、同時に、ユダヤ人が迫害し、パウロ自身も迫害して十字架に追いやったイエスであった。苦しみ、侮辱、十字架の傷跡をその体に刻みつけられたイエスが、死から蘇られてパウロに臨んでいるという出来事が、人間のゴールとして存在していた死が終わりではなく、力なきものにされてしまっていた。死は人間のたどり着く終りの地ではなくなっていたという出来事を認識したことが決定的だったのではないのでしょうか。キリストのように刑罰としての死を迎えなくとも、大なり小なり死はわたしどもにとって不安や苦痛、恐れを伴うものでしょう。しかし、キリスト・イエスに自分たちが刻みつけた死が克服されていた。死が終わりではなくなっていた。復活された主イエスにおいて神の大いなるご計画と赦しの愛が示されたことを知らされた時、パウロにとってゴールが変わった。死ではなく、死を滅ぼして救い主となってくださったキリスト・イエスが、彼の到達する目標となる。この方めがけて走ってゆくことが人生の目的となる。それにはキリスト・イエスが歩まれた跡を追ってゆかねばならない。十字架の道がそこに示されており、

その道をたどる者は主と共に生きることが許される。主を通して神を父と呼ぶことすら許される。そのとき世の中では苦しみと見えることが、しかし、永遠の命につながっていることが明らかになる。キリストに結ばれて死を迎えることこそ、キリストとともに新しく生きる復活の希望につながっていることをパウロは理解させて頂いたのです。終わりのための苦しみではなく、新しく生まれるための苦しみに、復活によって死の意味が変えられている。キリスト・イエスとともにある時、そのことがわかる。だからパウロは喜べたのです。このことはわたしたちも信仰において、人生を歩む上で弁えておきたいことですね。そのことをフィリピの信徒たちにも理解してもらうために、パウロは次にレースを走るランナーを譬えに出します。人生をゴール目指して走るマラソン競技に譬えたのはわかりやすいイメージです。ここでパウロはその走り方についてふたつの条件をつけています。なすべきことはゴールを目指すというただひとつのことですが、その場合に、1、後ろのものを忘れること、2、前のものに全身を向けること、このふたつが大切だということです。いまわたしは「～すること」と体言止めにして語りましたが、原語では「後ろを～忘れつつ」「前へ～向けつつ」と分詞構文で書かれています。動作を伴った表現、まさに走っている状態を彷彿とさせる表現です。たしかに走っている時に後ろを気にして首を捻じ曲げて振り返ればスピードは落ちますし、第一危険です。まあ、この譬えはスポーツとして考えるよりも、人生を語る比喩として用いられていますから、転ぶから危険という次元で考えるよりも、もう少しふくらませてパウロの言いたいことを捉えますと、まず、後ろを、つまり過去を振り返るな！ということが非常に重要です。これはわたしたちに刺さるアドバイスです。年をとってゆくと過去を多く持ち、未来が少

なくなっていく。逆に若い人は過去が少なく、未来の時間が多  
いわけです。わたしも還暦をすぎましたので、もうレースでい  
うならば4分の3は走り終わって、ゴールを望む第4コーナー  
に入ったあたりでしょうか。残りの時間を考えて、働きを考え  
るステージに入りました。それは世の中に対する社会的責任を  
含む事柄ですが、定年を迎えてそういうステージを終えられた  
方々は、老いていく日々の中でたくさん持っている過去のこと  
を様々な場面で引き合いに出すようになるのではないかと。パウ  
ロもそういう時期を迎えています。彼は牢獄のなかにおいて裁判  
を待ち、自分の死を覚悟しなければならない。身動きも自由で  
はない状態になれば、自分の人生は何であったか、過去を振り  
返って査定を始めてもおかしくない。けれどもパウロは自分の  
過去のことを塵芥のように思っているのです。パウロは過去の  
自分を裁かないのです。キリストの迫害者であった自分の過去  
を考えれば、自分は許されない人間だとは考えない。もちろん  
自分はそういう人間だったから、使徒の中でも最も小さいもの  
です、と他の手紙のなかで述べている箇所があります。しかし、  
それが決定的なのではない。パウロは獄中にあってもみずからの  
過去を否定的に振り返ろうとはしない。なぜなら、彼は復活  
の主の召されたからです。自分の罪をキリスト・イエスが負っ  
てくださり、その故に十字架の死を遂げてくださり、無知ゆえ  
の罪を赦してくださった救い主、贖い主であることを信じてい  
る。この方がおられるから、過去を気にする必要がない。必要  
なのは、キリストの恵みの大きさを知ることなのです。自分の  
罪など消し飛ばすほどに大きい神の恵みの豊かさを知ることな  
のです。だから「わたしの主、キリスト・イエスを知ることの  
あまりの素晴らしさに、今では他の一切を損失と見ています」  
と語ったのです。ですから、前です、前！主が待っておられる

前に向かって身を傾けてゆく。後ろではなく前に、天にゴールを定めて喜び勇んでかけてゆく。ここにキリスト者の生き方が、人生の平安があるのです。この消息に生かされたく願います。

お祈りいたします。